

ヨハネの福音書 第1章 36節（後ろ姿）

「イエスが歩いて行かれるのを見て、『見よ、神の小羊』と言った。」

荒野で叫ぶ声、バプテスマのヨハネ（以降ヨハネ）の声を聞く私たちに何が起こるでしょう。去って行かれるイエスの姿を見たヨハネの叫びが私たちにどのような意味があるのでしょうか。荒廃する国に生き、墮落した支配者のなか、荒野に立つ者の叫びを聞き受け止めることは、今日の私たちにどのような関わりがあるのでしょうか。

ヨハネには決定的な変化が起こりました。荒野も、荒廃した国も、墮落した支配者のいずれも眼中にはありませんでした。彼を取り巻く世の絶望とも思われることに巻き込まれることはありませんでした。彼の両眼に映し出されたのは、世の罪を取り除く神の小羊のみです。

荒野が映る目から救いの主を捉えた目が変わります。荒野で見る救いの主を叫ぶ者になります。救い主が歩いて行く後ろ姿を見たのです。見逃さず、見つめていたのです。去って行くお方の姿を、目に、唇に、こころに、そして叫ぶ者の足に刻んで荒野を歩み、進む者に変えられます。見よ、と叫ばれたお方を見た者の出来事です。